

解説

本史料叢書「海舟日記」は、平成二十三年に（五）を出して以来、久方ぶりの刊行となる。江戸東京博物館が所蔵する「勝海舟関係資料」を『史料叢書』として翻刻刊行する事業は、平成十三年刊行の「文書の部」から始まった。その翌年には「海舟日記」をスタートさせ、五巻までの巻数を重ねた。しかしこの間、編纂にかかる諸環境が変化し、作業はいったん中断された。再開の議が起こったのは、今から三年前のことである。以前のように毎年一巻ずつ刊行することは難しいため、余裕を持たせた工程で行った。

編纂の方針は、基本的にこれまでと変えることはしない。周知のように、すでに勁草書房版『勝海舟全集』が「海舟日記」を全文翻刻しているが、読み下し文の体裁をとっているため、本書は勁草書房版の難点を補う目的で、できるかぎり原本に忠実な翻刻に努めている。ただし、一般都民を读者として想定するという当初からの考え方に基き、句点付与の方針は変えないこととする。

また、人物註についても以前と同様に付していくが、今回から巻末に人名索引を設けることとしたため、最初に登場した人物について必要がない限りは何度も注記しない。索引の掲出方法は、同じページに複数回登場する人名を拾い上げられるよう、人名が現れる記事の日付で示すこととした。

六年ぶりの再開ということで、以前は余力不足のため作成すること

ができなかった索引を加え、さらに利便性を高めることを期した。ただし筆者の浅学で、原文の誤読や解釈の誤り、人物比定に誤りがあるかもしれない。利用者諸氏のご批判を乞うものである。

なお、原本の確認を望まれるのであれば、まずマイクロフィルムでの閲覧が可能である。さらに資料の実見を要する場合は、「特別利用」の制度もあるので、担当部署に相談されたい。

1 書誌情報

日記 第十冊 資料番号94201706

法量 縦一七・六cm×横一二・八cm 全九六丁、墨付九六丁

無銘の青罫紙を料紙とし、茶色の表紙を付けて袋綴じされている。

表紙の左半分には、海舟の自筆で「従明治五年壬申正月十五日到同年正月廿日 日記」と記される。その右には、後に書き付けられたと思われる「明治「五」号 海舟日記21」の標記があり、ラベルが貼付されている。【口絵1】

前後表紙の見返しに、家作の改装に関わる費用が記されている【口絵2、7】。これは、明治五年三月に静岡から上京した海舟が定住の地として選んだ赤坂氷川町の旧旗本柴田七九郎邸を譲り受け、改修した際のメモと考えられる。本日記によると、五月二日に柴田と屋敷の譲渡について協議、同月二十三日に五〇〇両の代金を支払い、六月七日前後に入居したとみられる。六月十日条に「大工江百両渡す」とあることから、この頃工事が行われたのであろう。六月の入居時には、

海舟の家族はまだ静岡におり、上京は八月のことである。

また、同じく見返しに貼付されている札は、「梶彦二郎姉婿」の字が海舟の筆である。明治六年五月二日条に、海舟が彦二郎に旅費等を渡した記事があることから、彦二郎が持参した竹井屋政平の書簡ないし進物に添えられた札で、これを海舟が貼付したものと思われる。

本冊に収められる記事は、表題と同じ明治五年正月十五日から同七年一月二十日までである。この間、明治五年末に太陽暦への改暦が実施され、同年十二月三日が明治六年一月一日となった。本日記も、明治五年の記事は十二月二日をもって終わり、翌日は明治六年一月一日から始まっている。

日記の日付はほぼ連続しているが、明治六年二月から四月前半にかけて、日付のみだったり、日付の記載も欠ける部分がある。この時海舟は、太政大臣三条実美の頼みで、新政府の政策に不満で出京しない鳥津久光と久光の怒りを受けて帰郷した西郷隆盛の上京を促す使者となり、鹿児島へ出張した。

本冊には、三点の付属文書が挟み込まれている。これは資料が当館に収蔵された時点での状況であるが、文書の内容はほぼ本冊所収の記事と対応するので、恐らく原状が維持されているものと考えられる。各文書については、本解説の最後を参照されたい。

日記 第十一冊 資料番号94201707

法量 縦一六・一cm×横一一・九cm 全九六丁、墨付九六丁

第十冊とは紙質の異なる無銘の青野紙を料紙とし、薄茶色の表紙を

付けて袋綴じされている。表紙の左半分には、第十冊と同じように、海舟の自筆で「従明治七年正月廿一日到于八年正月十四日 日記」と記される。その右には、第十冊と同じく後筆と思われる「明治六年海舟日記13」の標記があり、ラベルが貼付されている。【口絵11】

本冊にも、表紙の見返しに海舟自筆のメモがある【口絵12】。ここには、村田氏寿・岡田・嘉納の三人の住所が記されている。村田氏寿は旧福井藩士で、明治六年末に内務大丞に任じられた。岡田は、海舟の旧友岡田新五太郎の家で、養子斧吉（滝村小太郎の実弟）が箱館戦争で戦死すると、継嗣として海舟が四男七郎を養子入りさせた。嘉納は兵庫の廻船業者嘉納次郎作で、維新後は希芝と名乗り海軍主船権大属として横須賀造船所に勤務していた。いずれも海舟が長年交際を深めた人々である。なお、岡田家の継嗣の件については、既刊「海舟日記」（五）の藤田英昭氏による解説を参照されたい。

本冊に収められる記事は、表題と同じ明治七年一月二十一日から同八年五月十四日までである。日付はほぼ連続しているが、明治七年二月二十六日条の日付が欠けている。また、明治八年一月三日条に「来客、別帖有之」と記されているが、その別帖は確認できない。

第十冊・第十一冊ともに共通して言えることだが、日記には筆跡や行の配置等から、まとめ書きや追記と思われる形跡が見られる。例えば、明治五年七月一日条（【口絵4】）のように、翌日の記事にかかると追記の文が記入されることがある。この場合、原本の再現性より

も読者が文脈を辿ることを優先して、次の日付にかららないよう行送りの処理を行った。また、同年九月二十五日条（【口絵5】）のように、○印を付して、該当する記事がその翌日にあたることを示すような記号が施されることもある。そのような箇所については、筆者が気付いた限りで下欄の註で示した。この他、罫紙欄外上部に注記が施されるのは、これまでの日記と同じパターンである。

勝海舟研究の第一人者で、講談社版『勝海舟全集』（以下『全集』と略す）の編纂者である松浦玲氏がその著作においてよく指摘されることであるが、勝海舟の回顧録や談話などには時間軸や事実関係において不正確なことがあり、そのために歴史叙述の混乱を引き起こすことがある。「海舟日記」についても同様の問題を孕む。本書は記事の一つ一つに対して詳細な事実確認を行わないが、読者が個々の研究テーマに沿って、他の関連資料と比較しながら史料批判していただきたい。

さて、本書に収められる日記第十冊・十一冊の記事について、これから解説を加えていくこととする。内容は多岐にわたり、紙幅の限られた中ですべてを語り尽くすことは難しい。読者各位の関心によって、さまざまな読み方ができるであろう。

まず、当該時期における海舟の大まかな動きについて、年表ふうにするのと左のようになる。

明治五年三月三日 静岡出発

三月六日 東京着

五月 柴田七九郎邸を購入

五月十日 海軍大輔に任ぜらる

六月十五日 従四位に叙せらる

明治六年三〇四月 長崎出張を命じられる。実際は島津久光と西郷

隆盛の上京を説得する使者として派遣

十月二十五日 参議兼海軍卿に任ぜらる

明治七年二月十八日 正四位に叙せらる

七月二十二日 岩倉具視に辞意申し立て

八月二十八日 東艦破損の待罪書を提出

明治八年二月十七日 再度の辞表

四月二十五日 元老院議官に任命、直ちに辞表

この期間は、明治六年政変と岩倉遭難事件、引き続き勃発した佐賀の乱・台湾出兵、あるいは島津久光の政府参画とその波紋等と、明治政府が政権始まって以来、内政外交ともに最大の試練に直面した時期であった。また旧静岡藩について言えば、廃藩後東京へ再び移住した徳川宗家の動向や、静岡に残った旧藩士たちの処遇問題等と、徳川の主従たちが再び時代の新たな波にさらされた。海舟はその渦中に身を置いて、政府首脳の一員としてまた徳川家の顧問役として、難しい役回りを演じることとなったのである。

2 東京への移住

第十冊が始まる明治五年正月十五日は、海舟は静岡にいた。前年七月に廃藩置県が行われ、静岡藩知事徳川家達は任を解かれてその年の八月東京へ移住した。海舟は家達に随い上京、年末まで滞在の後再び静岡へ戻り、明治五年の元旦を静岡で迎えた。正月が明けると、榎本武揚らに獄中の箱館降伏人の赦免と徳川慶喜への叙位が決まったとの報を受け、戊辰の戦後処理が一区切りを迎えたと感じた海舟は、正月十一日に自ら断髪したあたりで、日記第九冊が終わる。体調不良もあつてか記事がまばらな正月・二月を経て、三月三日、海舟は静岡を発ち上京の途についた。

徳川家達は、当時牛込戸山邸（もと尾張藩下屋敷）を住まいとしていたが、戸山邸が陸軍省の用地として買い上げられることになり（5. 3 / 13 以下日記記事の日付を示す場合はこのように注記する）、移転先として赤坂福吉町の旧人吉藩邸が選ばれた（5. 4 / 15、4 / 16、4 / 17）。同じ頃に、海舟も福吉町邸の斜め向かいにあたる柴田邸を買い受け、以後亡くなるまでここが定住の地となった。本日記には「御向」の語が現れるが、これは徳川邸を指す。徳川邸と勝邸の「御向」関係は、明治十年に徳川邸が千駄ヶ谷へ移転するまで続く。福吉町邸への移転にあたり、徳川宗家は家扶家従らの人員整理を行うことになり、海舟は家令の溝口勝如から整理する人員のことや下賜金について相談を受けた（5. 8 / 23）。

海舟の家族も追々静岡を發し、赤坂の新邸に入った（5. 8 / 晦）。

家族について言えば、妹瑞枝（前名順子 佐久間象山夫人）の再婚相手である村上政忠（俊五郎）が、たびたび問題を起こし、海舟の手を煩わせる場面も散見される（5. 8 / 29、7. 1 / 5など）。

3 梅太郎の上京と小曾根乾堂

この時期の勝家にとつて大きな出来事に、長崎にいる海舟の子、梅太郎の上京がある。梅太郎の母梶クマは、長崎の裕福な商家の娘で、海舟が長崎伝習所時代に懇意となり、元治元年に海舟が長崎へ出張した折に再会、その年の末に梅太郎を産んだ。彼女は慶応二年に二十五歳の若さで病死したが、梅太郎は梶家で養育された。明治六年四月に九州へ出張した海舟は、帰途の四月二日から五日まで長崎に滞在したことが本日記から分かり、この間に梅太郎の上京を取り決めたものと思われる。梅太郎は梶家の祖母らに連れられ上京、勝邸を訪れた（6. 7 / 13、7 / 15）。梅太郎が来た時には、勝家では大変な騒ぎになつたらしい（勝部真長『勝海舟』）。

さて、ここで梅太郎の上京にさいして世話をした小曾根乾堂の国璽彫刻一件について、この場を借りて触れておきたい。

小曾根乾堂は、長崎の商人で、書と篆刻に優れ、印章制作を通じて要人との交際が広がった。海舟もその一人で、安政四年丁巳二月の年紀がある乾堂の「篆刻記録」（小曾根吉郎氏所蔵）によると、海舟が愛用した「物部義邦」の印章は、乾堂の手によるものである。

乾堂は、明治四年日清修好条規の締結にあたり、大蔵省等外一等附

属に任せられ、欽差全権大使を務める大藏卿伊達宗城に随行した。この時、明治政府が初めてアジアの国家と結ぶ条約に国璽御璽の必要が生じ、使節出立直前の五月三日に乾堂は印章の彫刻を命じられた（『太政類典』）。しかし、それは蠟石で作った急ごしらえのものだったことから、乾堂は黄金をもって改めて製作するよう進言し、明治六年三月十八日付で国璽等の彫刻を命じられた（小曾根家資料 小曾根乾堂辞令）。乾堂の一世一代の大仕事にあたり、海舟は当時宮内少輔だった吉井友実が乾堂のことを頼んだり（6.5/30）、宮内卿徳大寺実則に手紙を書いたりして（6.6/30）、できる限りの応援をしていることが、本日記からうかがえる。しかし、国璽御璽は結局乾堂の手によって作られることはなかった。宮内省が京都の印司安部井樸堂と鑄造師秦蔵六に篆刻を命じたことに対し乾堂が反対、結局乾堂が任を辞したのだという。乾堂は二度にわたり、自身が魂をこめる特別な印章を最後まで自分の手で彫刻したいとの願書を出した（『明治建白書集成』）が、容れられることはなかった。国璽・御璽の改刻が成ったのは、明治七年四月のことという。

4 海軍卿として

明治政府は、上京した海舟に対し、海軍大輔のポストを用意して迎えた。明治五年二月に兵部省が廃され陸海軍を分離、発足した当時の海軍省は、旧鹿兒島藩出身の川村純義が海軍少輔で、卿・大輔は空席である。さらに明治六年十月、政変で西郷隆盛らが下野すると、海舟

は参議兼海軍卿に昇任した。

相次ぐ政変と対外危機の中、複雑な政治状況のもとにあつて、旧幕府の出身でありかつ政府首脳の一員であつた勝海舟の立ち位置は特異なものだった。政府内の権力闘争から遠い位置にあつたことや、旧幕時代から培ってきた外国人を含む広い人脈を持つことが、明治政府にとって問題発生時の調停役となりうる貴重な存在だった。海舟が事あるごとに何度も辞意を表明しながら、政府がついに免官を許さなかったのは、こうした事情によるものであろう。太政大臣三条実美からは何かと相談を受け頼りにされており、本日記には名前が最も多く登場する。三条が扱いに苦慮していた島津久光について、海舟が両者の間に立ち執り成しに積極的に関与したことは、松浦玲氏の研究に詳しい。

明治海軍のトップの座に就いた海舟だが、「時々出ていって、小印をつくばかり」と話し、参議の職にあつた時も、回覧される決裁書類を読みもせず「大木（喬任・筆者注）のお伴でズン／＼印をついた」（『海舟語録』 講談社版『全集』二〇巻所収）と、まるでやる気のない勤務実態だったことを、晩年自嘲気味に語った。

実際海軍省の現場では、その立場とは裏腹に諸官たちと意見が合わず、幾度も衝突を繰り返した。その様子は本日記の端々から伺える。

例えば、明治六年一月十三日、ある事で「海軍省諸長」が海舟に建言し、一日談論の末、海舟は出勤せず、川村を大輔に、中牟田を少輔にせよとの書付を省に送り、廟堂では「小臣微力、海軍省之事御免蒙り度」と辞意を洩らしたことが記される（6.1/13、1/14、1/

15、1/17)。本日記はこの時何が問題だったのかを記していないが、一月十七日に海軍省が政府の諮問を受け大規模な海軍整備計画を提出したこと（『海軍創設史』）や、また同日に、それまで工部省が設計を進めていた天皇の御召船を海軍省が軍艦に計画変更し認められた（『横須賀海軍船廠史』）ということがある、軍備計画を巡る意見対立だったと思われる。

また、明治七年一月には、榎本武揚を海軍中将に任官することに対し海軍省内で強い反発が起こり、海舟は榎本の任官取り消しと自分の免職を求めた（7.1/21、1/22、1/23）。事の始まりは、台湾・朝鮮と並び外交上喫緊の課題となっていた樺太境界を巡る対露交渉のため、榎本を駐露公使に任命したことともなる人事で、海舟からの推薦によるものだった。その時提出した上表が残されているが（講談社版『全集』第二十二巻所収）、その中で海舟は、自分が海軍卿となつて指令を下していても、「其実同省之諸官内心潜に心宜からざる」ことに気付かず、榎本を推薦したことを「何共兪忽之至」であつたと述べた。この一件は、海軍省の人々が海舟に対して実は厳しい感情を抱いていたという、根の深い問題の表れであつた。

海舟の海軍省時代に、内政問題と並んで緊迫したのが、朝鮮への西郷遣使問題と台湾出兵だが、この時も海軍諸官との間でぎくしゃくする有様に、彼の海軍観が垣間見える。

明治六年十月、西郷隆盛の朝鮮遣使の議が大詰めとなり、岩倉邸で三条同席のもと「海軍之事其他」の談があつたが（6.10/11）、その

さい三条から問われた海舟は、兵備の不足を言い、万一政府が戦争を命じたら自分は辞職するほかないと答えた（明治六年十月十二日付岩倉具視宛三条実美書簡『大久保利通文書』）。しかしこれに対し、海軍省の内部では反発が起きた。明治六年政変が起き、海舟が海軍卿に就任した直後、海軍裁判中主理吉田清貫は、西郷の遣使中止の理由とされた陸海軍の軍備不足の現状と、これを改めようとする海軍省の怠慢を責め、軍備増強を重視した組織改革を断行するよう求める建白書を海舟に突きつけた（講談社版『全集』別巻所収）。これは、弱腰な海軍卿に対する海軍の現場からの不信任の表明でもある。

海舟は晩年、長崎海軍伝習所時代を振り返つて「ヘンデルキが「お前は日本の海軍を起す人だが、海軍には金があるから、その積りで財政の事を知らねばならぬ」と言ふたから、それで財政々々と言ふのサ」（『海舟語録』）と語つた。莫大な経費を要する海軍を起すには、まず国を富ませることが先で、それには長い時間がかかるというのが、初めから海舟の海軍観の基本にあつた。文久二年に海舟が軍艦奉行並に任じられた時、將軍の御前で海軍建設計画につき意見を求められると五〇〇年かかると言い、小栗忠順らが横須賀製鉄所の建設を進めた時にも、海舟は彼等の果敢な挑戦に対し冷やかな目を向けた。しかしこうした姿勢が、海軍興隆を目指して日々奔走努力する川村純義以下海軍の将官たちとはそもそも相容れないのである。

明治七年五月、台湾遠征を実行に移しながら外国公使から横槍を入られると簡単に腰砕けとなつた政府に対し、川村純義は優柔不断な

迷走ぶりを激しく非難する意見書を書き（『大海軍発展秘史』）、海舟を出し抜いて辞表を出し出勤しなくなった（7.5/9、5/12）。それから二ヵ月後、出兵後の対応を巡り政府は清との戦争やむなしとの決定に至り、陸海軍両卿に対し準備をするよう内達した（6.7/9、8/2）。それまで、台湾遠征における陸海軍務は台湾蕃地事務局の主導下にあったが、陸海軍に直接大命が降りると、川村は出勤を始めた（7.7/17）。一方これと引き替えに、海舟は七月十九日を最後に海軍省へ出勤しなくなった。川村は、八月五日に海軍中将兼海軍大輔に昇任、事実上の海軍卿代理として急ピッチで開戦準備を進めていく。こうした中、長崎に待機していた東艦が暴風で破損する事件が起きた（7.8/27）。当時在清中の樺山資紀は、日記『台湾記事』の中で、この時海舟が悲観的な言動をし、これに対して参議の伊地知正治が、東一艦が沈没しても海軍の勢力に影響はないと一喝したという「奇談」を記している。この時から、海舟は閣議にも出席しなくなった。

『海舟座談』の中に、海舟に近侍していた森田米の談話として次のような話がある。「海軍のころが、一番弱りました。毎晩、十二時頃までですもの。河村サンがよくお出になりましたが、ニラミ合いですもの。ニラミ合いの時が一番困ります。ソナナ時に用でもあつて申し上げると、散々ですから」。二人の「ニラミ合ひ」は、この頃のことだったのだろうか。

結局、大久保利通による交渉によって清と戦端が開かれることはなかったが、日本海軍史において、台湾出兵は明治海軍が外洋での軍事

行動に向けて一歩踏み出した大きな画期と位置づけられている。

5 外国人内地旅行問題

次に、台湾出兵と同じ頃に交渉の山場を迎えた外国人内地旅行規則問題に目を向けてみたい。

日本に滞在する外国人の自由な移動を禁ずる制度は、明治政府になってからも続けられ、外国公使は制度の緩和を求めていた。明治七年六月に入り「洋人内地旅行」の会議が行われ（7.6/10、6/16、6/18）、六月二十日英国公使パークスが出した規則案に対し日本側の修正案を説明する談判の場に、海舟は大木司法卿とともに出席した（7.6/20）。交渉は「談甚困難」であったと本日記には記されている。

この時の記録（『大日本外交文書』）によると、パークスらが次々と詰問を浴びせるのに対し、海舟は「衣服等洋風ヲ模シ遠ク教師ヲ西洋ニ要ム之ヲ以テモ強テ拒マザルヲ御察見アリテ如是御切迫無之候テモ可宜」と愚痴のように呟いたという。また、談判終了後に一人残ったドイツ公使に、海舟は長崎海軍伝習所時代を引き合いにし、外国人が出島の外へ出かける際に番人を付けていた頃と比べれば、今はかなり改善され日本人も少しずつ進歩しているから、もう少し長い目で見守ってほしいと語った。このような漸進姿勢は、六月（日不明）の日付で三条実美に提出した答書（講談社版『全集』別巻所収）の趣旨と共通する。

この日から、海舟はパークスや英国公使館書記官サトウと数回接触

して話し合いを重ねていることが、本日記からうかがえる(7.6 / 20、6 / 21、6 / 25、6 / 26、6 / 28、6 / 29、6 / 30、7 / 4、7 / 13)。海舟は、パークスの意見を閣僚へ取り次ぐなど、双方の調整役を果たし、妥協点を見出すことにも成功したようである。萩原延寿氏は、サトウの海舟への接触が情報収集のためであったとされる(『遠い崖』)が、実際には両者はそれ以上に踏み込んだやり取りをしていたと評価できよう。その結果、七月十三日に寺島外務卿から各国公使に宛てた書簡で示された日本政府の方針は、パークスの希望に沿うものではなかったが、外国側の意向を汲み取ったニュアンスを含んでいた。これを受け、海軍兵学寮教師のホーズと画家のワグマンが海舟を訪ねてきた(7.7 / 17)。サトウとホーズ、ワグマンの三人は、仲の良い旅仲間であった。

6 徳川家霊廟・上野東照宮の整理と上野公園の誕生

さて、ここで再び徳川家に話題を戻したい。東京へ戻った徳川宗家が最初に着手した大がかりな仕事は、上野寛永寺の霊廟と上野東照宮の整理である。寛永寺は、上野戦争で根本中堂などいくつかの堂宇が焼失し、全山が荒廃した。上野山内は収公され、明治元年末に会計官から東京府へ管轄が移ったが、その当時徳川家霊廟と東照宮は、「精銃隊」(精鋭隊の誤りか)が警衛にあたっており、霊廟施設の使用や出入りが黙認されていたという(『東京市史稿』遊園篇第四)。明治二年二月、霊廟は徳川宗家に返付された。芝増上寺の霊廟も、明治四年

八月に返された。明治四年十月、徳川宗家は霊廟の取り壊しや自由な参詣について東京府へ申請し、許可を得た(4.10 / 8、10 / 12)。

この件について、海舟は早い時期から相談に預かってきた。上野霊廟整理の経緯について、後年海舟が書いた手記が残されている(『東叡山之事』 講談社版『全集』第二巻所収)。これによると、永峰弥吉ら赦免された戊辰戦役の降伏人たちが、霊廟の荒廃ぶりを責めたため、海舟は彼等を差配して、大破した祠堂は破却、そうでないものは修理して、霊廟の整理を行わせた。また、銅灯籠や旧財は売却して霊廟の修理費に充て、その結果費用は五・六万円にのぼったがそれでもなお三万円の剰余金が出たという。

本日記にも、これと対応する記事が多く見られる。明治五年三月、海舟は上京すると直ちに上野へ行き、永峰弥吉に万端を指示、自身も参拝し見分を行った(5.3 / 12、4 / 8)。六月には、大黒屋榎本六兵衛と「御霊屋御払物代」等について相談した(5.6 / 22)。このことから、上野霊廟の旧財売却についてその取引にたずさわったのが榎本六兵衛であったことがわかる。彼については、本解説末尾の付属文書①の項を参照されたい。その売却で出た剰余金三万円は、明治六年五月五日に起きた皇居炎上のさい徳川宗家が宮中に差し出した献金となったと、海舟の手記には記されている。

明治六年五月、海舟は霊廟の見分に向き、おおよそ完了したさまを見届けた(6.5 / 11)。霊廟の整理が一段落すると、次に東照宮の修築に取りかかる。五月徳川宗家は東照宮の修築許可を申請し、七月

海舟は大久保一翁から政府の許可が出たとの報せを受けた(6.7/2)。また同時に、一翁から芝と上野のどちらを府社とするかの相談を受け、海舟は上野とすべきと答えた(6.7/6)。七月二十二日、上野東照宮は府社と定められた。東照宮の修築も引き続き永峰に担当させ、鳥居木のことなどを相談(6.8/20、9/1他)、海舟みずから東照宮の幟を認め、九月十五日に祭礼を行った(6.9/6、9/15)。この時の整備で、参詣者の利便を図るために池之端から登る参道が新たに設けられ、参道の入り口には旧江戸城紅葉山東照宮にあった石鳥居を移設した。

霊廟と東照宮の修築に従事した永峰弥吉は、箱館降伏人の一人で、明治三年に赦免後静岡藩に復籍、人見寧とともに静岡の教育機関集学所の設立に尽くした人物である。先の海舟の手記では、その永峰に対して霊廟の東麓にあたる土地を入手して居住・開墾に当たらせ、霊廟の入費にあてたという。社会復帰した元脱走人たちの不満のエネルギーを宗廟の護持に向けるという、海舟一流のあざやかな人材活用方法である。

なお、ここで付け加えておきたいのは、上野山内の整理が、上野公園の成立史と密接に関わっていたことである。

収公後の上野山内は、陸軍省や文部省が用地を望むなど、省庁による用地獲得の草刈り場の様相を呈していた。明治六年一月、政府は各府県に公園地の選定を命じ、東京府は寛永寺・増上寺他五ヶ所を公園地とすることを上申、これにより東照宮の整備は公園地の整備計画と

関わりながら実施されていく。

この時の東京府知事は、大久保一翁であった。政府の布達が出されると直ちに東京府は、上野の土地を文部陸軍両省へ引き渡さないよう求める上申書を政府に提出したが、その中で一翁は、旧来の廟所や寺院建築が残る上野の景観は、外国の公園に倣うことは難しいが、それがむしろ「今日ニ在テハ却テ一層之好景トモ可相成」(『東京市史稿』)と主張した。また、上野東照宮が府社と定められたさい、東照宮に付属していた五重塔の扱いについて一翁は、神仏分離の原則上不都合となる五重塔を社地から切り離し「公園遊覽地中之附属ト見成」(同)すことでのいかと教部省に掛け合い、その景観を守った。上野公園地の利用形態はその後も転変したが、戦火で荒廃した徳川將軍家の聖地上野を、市民に開かれた公園という新たな形で伝える戦略は、またも海舟と一翁のコンビによって見事に功を奏したのである。

余談だが、整理される前の寛永寺徳川家霊廟を撮影した写真が、霞会館や東京国立博物館等に所蔵されている。撮影者は横山松三郎とも内田九一とも言われるが未詳である。本日記中に、内田が「日光・芝・上野之写真」を持参してきたという記事があるが(5.10/17)、撮影者を推定する上で手がかりの一つになるかもしれない。

この他、徳川宗家に関わる海舟の動向では、明治八年に行われた華族会館への書籍の寄付が注目される。経緯の詳細については広瀬淳子氏の論文を参照されたいが、明治七年の暮、尾崎三良が海舟を訪ね「書籍館之話」を持ちかけてきた(7.12/30)。華族会館が図書館を設け

るにあたり、徳川家に集書の協力を依頼したのであった。尾崎は、前名を戸田雅楽といい三条実美の家人だった。徳川宗家はこの要請に応じて、二〇〇〇冊以上にのぼる和漢洋書を納め、さらに二〇〇〇円の寄付金を出したのであった。すなわち現在学習院大学図書館に所蔵される徳川宗家旧蔵書である。この寄付を周旋したのが海舟であり、主に洋書の購入には瑞穂屋卯三郎があたったことが本日記から知られる。皇居炎上の際の献金といい、華族会館への書籍の寄付といい、徳川宗家が機を逃さず皇室への貢献を見せることで、徐々にその存在感を高めていくよう、海舟は着実に布石を打っていったのである。

7 支援と嫌疑と

廃藩と徳川宗家の東京移住にともない、旧静岡藩士たちもそれぞれの去就を決めることになった。

大久保一翁は、静岡に残って隠栖する意向だったが、海舟や吉井友実の説得で上京、一度は文部省の辞令が出たがこれを辞退、結局東京府知事になった。静岡県発足当時に旧藩幹部で静岡県の官吏として残ったのは、浅野氏祐・服部常純・松平勘太郎などがいたが、彼等の大半もやがて東京に職を得て静岡を離れていった。戸川安愛のように、いったん自分の知行地に帰る者もいた。

また、海舟のもとにはさまざまな人物が訪れ、借金や救助金を求めてきた。本日記の本文や上欄には、しばしば出金の記録が書き留められる。後年海舟はこうした金銭の出入りについてまとめあげ、「戊辰

以来会計荒増」(勁草書房版『全集』所収。草稿は「戊辰以来会計記」「瓦解以来会計草稿」と題する二種がある。前者は講談社版『全集』に収められ、後者は勁草書房版『全集』に入っている。また「会計荒増」と「会計草稿」の原本は当館所蔵)という標題で後世に残した。ここでは個々について解説しないが、同書と本日記記事を併せて見ていくことでより理解が深まる。

なお、他で説明する場所がないためここで触れるが、本日記明治五年二月七日及び六月十三日条に見える多田新九郎という人物の身元について、当館に彼の名刺が収蔵されている(資料番号06001186)。本日記とは異なる資料群の中の一点なのだが、それには「元壱加番屋敷跡はノ七番 岡田貞次郎同居 多田新九郎」と記されている。このことから、彼も静岡に残った藩士の一人と推定される。

海舟のもとを訪れるのは、困窮者にとどまらない。政変を聞いて郷里に駆け付けようとする者、建白書を持参して政府に取り次ぎを願う者も押し寄せた。後述するが、明治六年末にモルレーの通訳として勝邸を訪れた高橋是清は、「当時はいわゆる天下の志士なるものが、日々勝さんのところに議論に行く」(『高橋是清自伝』)ので、海舟は彼等の熱気を冷ますために意表をついた応接をしたのだという。

明治六年政変による西郷下野とこれに続く佐賀の乱は、海軍にも動揺を与えた。本日記明治六年十一月一日条に、「海軍大中尉六名」が帰国暇乞をしたという記事があるが、これは明らかに政変の影響を受けたものである。また、海軍兵学寮生徒の中でも、以前から海舟が

面倒をみていた薩摩出身の山本権兵衛と学友の左近允隼太が、退寮して国に帰ると言い、海舟は二人の求めに応じて金子を貸した(7.2/21)。ちなみに、帰郷した山本と左近允は西郷隆盛に会ったが、海軍修業に専念せよとの西郷の説諭を受け、山本は学校へ戻ったが、左近允は鹿児島に留まり西南戦争で薩軍に加わり戦死したという。また、土佐出身の海軍中佐片岡健吉は、病気を理由に辞職した(7.8/8)。これも、政変で下野した板垣退助や佐賀の乱に影響されたものと見え、高知に帰ると板垣らと合流して立志社を立ち上げた。

明治七年八月大久保利通が渡清した後、海舟のもとに樋渡五助が同志の鹿児島県士を引き連れて「支那之事ニ付趣意申聞」、海舟は両大臣に取り次いだ(7.8/11、8/13、8/20、8/22)。かつて「虎尾の会」メンバーでヒュースケン暗殺の前歴がある樋渡が、何を申し出たのかは本日記からは読み取りにくい、彼のような元攘夷激派が行動を起こそうとしていたという事実が興味深い。建白を持ち込む者もあり、明治七年九月十三日に押しかけてきた秋田県士族高垣尚志と、同八年五月五日に新治県から出て来た英学生宮内猪三郎の建白書は、『明治建白書集成』に収められている。他に士族ではないが、明治七年六月二十七日に高島屋嘉右衛門らが海舟を訪ね、「蒸気機械之事并船々之事」を談じたという記事がある。翌月嘉右衛門から勝海軍卿宛に建白書が出されたが、その内容は日本船舶の全面洋式化と海軍の持つ造船技術の一般への普及を提言したもので注目される(『明治建白書集成』)。

しかし、こうした海舟の関口の広い人との接触が、時に司法当局から疑念の眼で見られ尋問を受けることもあった。

内輪の事件ではあったが、海舟が赤坂氷川町邸に住んで間もない明治五年七月十五日、邸内で家僕同士の殺人事件が起こり、加害者の益田与三郎が逮捕された。この一件については、本日記の記述(5.7/16、7/17、7/22、7/23、8/5、8/24、8/25、9/15)の他に、「海軍省公文類纂」明治五年法律部の中に、海舟に対する処分が記録されている。これによると、与三郎を詮議中に彼が無籍だったことが分かり、海舟は無籍者を無届けで雇用していた責任を問われて謹慎三〇日を命じられた。

もつともこの謹慎はすぐに解かれたが、この事件のポイントは、勝家の使用人が無籍者であった点にある。おりしも壬申戸籍が編成されたばかりで、海舟に対する処分は綱紀肅正という意味合いを持つとともに、危険分子の可能性もある無籍者を不法に抱えていたことに対する警戒心を司法当局が持っていたことの現れではないかと思われる。

この騒動が一段落すると、さらに畳み掛けるように、古荘嘉門の件に関して司法省が海舟を尋問した(5.11/13、11/14、11/17、11/18、11/24、6.4/27)。反政府活動の嫌疑で逃亡していた古荘が海舟が匿ったことについては、すでに「海舟日記」(五)で藤田氏が解説しているので参照していただきたいが、この一件を見ても、海舟が当局から要注意人物としてマークされていたことが分かる。

他にも本日記には、当時密偵をしていた荘村省三が海舟を訪ねた記

事(7.7/25)も目を惹く。海舟は以前から莊村を見知っており、その時の用件は、彼と同じ熊本県人であつて師事した横井小楠の甥横井左平太の消息を伝えることだったが、その裏には勝家の動向を探索する目的もあつたのかもしれない。また、明治七年一月十四日に起きた岩倉遭難事件の直後、海舟は岩倉に「村上其他之事申上」げた(7.1/19)。これは、日頃から素行に問題があつた村上政忠にも、犯人の疑いの目が向けられていたことを示唆するものと思われる。

海舟が海軍省にも閣議にも姿をみせなくなつてからの明治七年十月、もと海援隊士で海軍省の官吏になつていた安岡忠綱(金馬)が、「小拙之進退」について悪評が立つていることを海舟に忠告した(7.10/20)。大久保利通が台湾出兵の処理をめぐる清国との交渉のため不在の間、海舟が政府から離れることで不穏な動きをするのではないかという憶測が流れたのだろう。年末には、白川県の石井平太に金を遣わしたことに對する嫌疑で、またも勝家の執事が東京府から呼び出しを受けた(7.12/17)。こうしたいくつもの疑いが、後に西南戦争時の西郷党への資金提供疑惑に繋がっていく。それは、次回刊行分の話である。

8 長男小鹿の米国留学とその周辺

最後に、米国留学中の海舟の長男小鹿とその周辺の人々について見ていくこととする。

小鹿は、慶応三年十四歳で留学の途につき、ラトガースカレッジ系

の予備学校で基礎教育を受けた後、明治四年アナポリスにあるアメリカ海軍兵学校に入学した。小鹿には海舟の門人富田鉄之助と高木三郎が付き添い、在留した。彼らから時折送られる手紙は、岩倉使節団のアメリカ到着など、現地での様子を海舟に伝えた(5.2/25、3/26など)。

小鹿をアナポリスに送つた後の富田と高木は、それぞれの修学に励み、現地で外交官としての職務にも従事した。明治七年七月、富田と高木は賜暇帰国し、十一月の再渡米までの間に帰郷を果たしている(7.7/21、9/6、11/15、11/16)。

さて、小鹿や富田・高木らをはじめとして、明治初年にアメリカで学んだ日本人留学生は数多い。本日記第十・十一冊に名前が見える明治五〜七年時点での米国留学生は、左記の通りである。

(旧盛岡藩) 奈良真志

(旧庄内藩) 高木三郎

(旧仙台藩) 富田鉄之助

(旧長岡藩) 白峰駿馬

(旧静岡藩) 大儀見元一郎・江川英武・勝小鹿・川村勇・木村熊二・

外山正一

(旧高知藩) 菅野覚兵衛

(旧山口藩) 富田貞次郎

(旧熊本藩) 横井左平太(伊勢佐太郎)

(旧佐土原藩) 平山太郎

(旧鹿兒島藩) 畠山義成(杉浦弘藏)・松村淳藏・最上五郎

彼等留学生たちの多くが学んだアメリカの教育機関は、小鹿も学んだニュージャージー州ニューブランズウィックにあるラトガースカレッジとその関連の予備学校であった。こうした関係から、この時期日本に招聘されたアメリカ人教師は、ラトガース関係者が目立つ。本日記に登場するグリフィスは、ラトガースで学び当地で病没した福井藩出身の日本人留学生日下部太郎との縁が、来日のきっかけの一つだった。さらにグリフィスの紹介で、エドワード・W・クラークが明治四年九月に静岡学問所付設伝習所の教師として来日した。

海舟は、とりわけクラークに対しては心を砕いた。クラークが来静して一年もたたない明治五年八月静岡学問所が廃止され、クラークはなおも伝習所で熱心に教育にあたっていたが、伝習所に対する静岡県庁の薄情な仕打ちに失望すると、上京して文部省に勤めたいとの希望を海舟に申し出た(6.8/7、8/23)。クラークの就職に奔走したのは、静岡学問所一等教授ですでに大蔵省翻訳局に出仕していた中村正直(敬字)である。海舟も、文部省の田中不二麿に会い、クラークの就職を働きかけた(6.10/20)。その甲斐あって、明治六年末クラークは開成学校の教師として雇用されることになった(6.11/14)。

東京でのクラークは、海軍兵学寮で幻灯の上映会を開いている(7.5/6、5/11)。奉職一年を経て、クラークは明治八年ついに帰国した。帰国に先立ち、中村と同道して海舟を訪ね、別れを告げた(8.3/6)。

もう一人、ラトガースの関係者といえば、ダビッド・モルレーがいる。モルレーは、ラトガースカレッジの教授で、明治六年に文部省から学監として招かれた。アメリカでは、小鹿に数学を教えていたという。モルレーが勝郎を訪れたのは、明治六年十一月十日のことである。その前日に米留学経験のある湯地定基からの予告があり(6.11/9)、翌日モルレーが来訪した。海舟は、息子が世話になったこの教師に厚く礼を述べた。その後海舟は二度にわたってモルレーを訪問(6.11/11、11/13)、さらに年明け早々には海舟の家族がモルレー宅へ招かれるなどして、交流を深めた。

ちなみに、モルレーの勝郎訪問については、通訳として同行した高橋是清が自伝の中で語った逸話が有名である。本日記にはモルレー訪問の同行者に「杉浦」の名が記されるが、高橋是清の名はない。しかし是清の記述内容から、これは十一月十日の初訪問であったとみるのが妥当と思われる。是清は小鹿とともに渡米した間柄で、この当時は文部省に出仕していた。是清はそれまで海舟と面識はなく、玄関から座敷まで案内した粗服の老人が実は海舟本人だったことに驚いたのだが、海舟もまた是清を杉浦弘藏すなわち畠山義成と見誤ったことになっている。

ところで、明治六年末、政府は官費留学生の全面廃止を決め、全員を帰国を命じた。廃藩後、政府は各藩の派遣あるいは私費の海外留学生を引き受け官費で留学を継続させていたが、その費用が財政を圧迫したことや学業不振の留学生が少なくなかったことなどから、留学制

度の全面見直しを図ったのであった。陸海軍省の留学生についても調査を実施することとなり、海舟は川村純義へ指示し、海軍学生のうち帰国対象者について話し合った(6.12/7、12/13)。十二月二十日に海軍省が提出した米英仏留学生の名簿は、留学生三八名のうち三二名を継続留学とし六名を帰国させるというものであった(『公文類纂』)。小鹿は継続組である。

帰国を命じられた六名のうち、本日記に名前が登場するのは、江川英武・伊勢佐太郎・平山太郎である。伊勢は、横井小楠の甥で本名は横井左平太。兄大平とともに慶応三年に渡米し、明治二年松村淳蔵とともにアメリカ海軍兵学校に入学した。松村は順当に兵学校の課程を修了し卒業したが、左平太は学力不足のため進級できず、明治四年に退学していったん帰国、翌五年に海軍省留学生となって再度渡米した。その矢先に帰国命令が下ったのであった。左平太は、明治七年四月に滞在先のワシントンと離れ、五月に帰府届を提出した(7.5/19)。帰国後の左平太は、元老院に職を得たが、病のため明治八年十月に三十一歳の若さで死去した。平山太郎は、明治二年に佐土原藩主の子に従い渡米していた留学生である。帰国後は一時海軍省に勤務したが、のち文部省学監事務所に入りモルレーを補佐した。また江川英武は、英龍の子で最後の葦山代官。岩倉使節団とともに渡米し、未だ学半ばというところであった。英武は政府の帰国命令を拒み、自費で留学を続けた。帰国は明治十二年のことである。

以上、取り止めのない解説となったが、なお取り上げきれなかった話題も数多い。また、既刊の各『全集』に収められている数々の書簡来簡、意見書・著述類などには、本日記の記事と関連するものがある。本解説ではその一部しか紹介できなかったが、併せて参照していただきたい。

最後に、小曾根乾堂の国璽改刻一件については、乾堂の直系のご子孫にあたる小曾根吉郎氏からご所蔵の資料を拝見させていただいた。末筆ながら感謝申し上げます。

付属文書について

① 利金渡証文 一通【口絵8】

縦一七・〇cm×横二六・三cm

「戊一月」(明治七年一月)の日付で、榎本六兵衛から海舟に宛てて出された証文。六兵衛が借用している一万円の月利息六六円六七銭を納めたものである。本日記にはこのことを書き留めた記事が認められないが、「戊辰以来会計荒増」の明治七年の冒頭に立項されている。

榎本六兵衛は、大黒屋と称する東京神田和泉町の豪商である。彼の経歴や逸話については、『史談会速記録』第九十一輯(明治四十二年一月)に収められる、子息六輔による「榎本六兵衛君報効事歴談」あるいは彼の姪で大津事件に絡んで自殺を図り衆目を集めた畠山勇子の伝記に詳しい。

六兵衛は、質商兼呉服唐物商を営み、金銀座御用も務めていた。ま

た、加賀藩や長州藩の金用達もし、伊藤博文や井上馨らの洋行を手助けしたことも知られる。明治維新にあたっては、大総督府に二万両の献金をし、大坂での貨幣鑄造では外国の銀行からドル貨幣の地銀を買い入れ一分銀の鑄造を行うなど、大いに活躍した。当時、支店が大阪・横浜・静岡にあったという。

上野寛永寺の徳川家霊廟と上野東照宮の整備に六兵衛が関与していたことは先に触れた。六兵衛の義母仲は八重垣という名で天璋院の祐筆を務めていたといい、そのような縁からも徳川家との関係が深かった。六兵衛は材木も商い、維新のさい幕府から預かっていた深川木場の材木を海舟からの交渉を受け一括買い取ったという話も伝えられる。東京營繕会議所では、頭取の一人に名を列ねていた。上野の霊廟の部材や什物が売却された際、六兵衛は初め海舟を諫めたが、旧幕臣の救済のためやむを得ないと説得を受け、霊廟をフランスに売り一五万ドルの売値を得たという。また、上野東照宮に移設された紅葉山東照宮の鳥居についても、六兵衛が引き取ってきたものという。

一方、同じ頃、六兵衛は開拓使御用達を命じられ、政府の多額の出資を受けて一〇年計画で北海道の開拓と当地の物産を輸出する事業に携わるようになった。そのような中で六兵衛は、明治六年六月末に徳川家から七千両、海舟から三千両、合計一万両を借用したのであった（6.6/29、6/30）。この証文からは、借金の利息が年八分（八パーセント）で、これを月割した六六円六七銭が一ヶ月分の利息になることがわかる。本日記には、この一万円の利金の納入記録が書き留め

られる（6.10/1、12/24）。この証文が出されたのとはほぼ同時の明治七年二月一日、一万円の元金は徳川家に返済された。

しかし、六兵衛の開拓事業は、ここに至り資金繰りが困難となった。明治六年十一月、六兵衛は上野公園の建設を自費で一手に請け負うことを東京府に願い出た（『東京市史稿』）が、翌年三月に六兵衛自らが取り下げしてしまう。恐らく、北海道の事業が行き詰まったことと関係があると思われる。明治七年四月、六兵衛は海舟を訪ね自身が隠居したことを報告した（7.4/25）。

明治七年十月、政府は突然大黒屋に出資金の返納を求めた。海舟も、大黒屋の借金への対処について、溝口勝如と相談している（8.4/12）。なお、政府への返済期限は明治八年八月とされたが、大黒屋は結局期限に間に合わず、家産の全てを競売に付されるという不幸な結末となった。

② 勘定覚書 一枚【口絵9】

縦一六・五cm×横一〇・五cm

上部に洋算による計算メモ、下部に金銭の支出メモが記される。

計算メモの方は、右側は乗算とわかるが、左側は不明。計算メモとそれ以外の記述は墨の濃さが違い、同時に書かれたものではないと推測される。恐らく計算が書かれた紙の余白を使って、他のメモが記されたものと思われる。

下部のメモは、そのまま本日記明治五年三月十五日条と同月十七日

条の記事に対応する。三月十五日の方に記される「細測」「立野」は、日記記事及び「戊辰以来会計荒増」によると、細測源一郎と立野雄二（「会計荒増」には雄三とあり）という名である。立野雄二は、「静岡御役人附」に静岡藩水利路程掛雇の一人として名前が見える。細測や立野の名は、他にも本日記明治四年十一月一日条の上欄及び同月八日条にも見え、海舟が修業料として金銭を渡していることから、いずれも付属文書③の並河一と同じく、廃藩後は集学所の生徒として入学したのではないかと想像される。

三月十七日の方は、佐久間象山の遺稿『省魯録』の製本代金を福田鳴鷲に渡したメモである。『省魯録』の刊行作業は、前年の明治四年から始まり、五年三月に刊行をみた。福田からは、三月と四月に本が海舟に届けられたことが本日記に見える（5.3/21、4/4）。刊行の経緯については、「海舟日記」（五）の解説を参照されたい。

③ 名刺「並河一」 一枚【口絵10】

縦八・四cm×横二・六cm

「並河一」の名は、本日記の明治五年二月二十八日条に見ることが出来る。これによると、この日海舟は並河へ六両、「武蔵」へ十二両を渡したという。名刺は、その際に差し出されたものか。

並河一は旧静岡藩士で、前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』によると、嘉永五年生まれで静岡移住当時は十六歳、家禄九石を給され有渡郡大谷村に居住していたという。明治五年に新川県に出仕、警

察官となって青森・新潟・富山・福井の各県で警部を務め、明治四十三年に福井県警察部長になった。また、明治四十五年刊の『現代人名辞典』では、もとは滋賀県出身、小川函右衛門の三男で、後に並河家を継いだとある。

並河が住所としていた大谷村は、人見寧や梅沢敏らが開設した集学所の所在地と重なり、彼が集学所の生徒であったことを推測させる。なお、並河とともに海舟から金銭を渡された「武蔵」は、武蔵孫三という人物で、本日記明治四年七月二十八日条・八月六日条・同月二十五日条、ならびに「戊辰以来会計荒増」の明治四年の記事に名が見える。このうち八月六日条には、武蔵が集学所へ入る旨が記されている。このことから、並河が武蔵とともに集学所の生徒だった可能性を裏付ける。
(落合則子)

参考文献

人名註記や解説で使用した、主要な諸資料・書籍文献を掲載した。

基礎資料

- 海舟全集刊行会編『海舟全集』（改造社 一九二七～一九二九年）
- 勝部真長他編『勝海舟全集』（勁草書房 昭和一九七四～一九八三年）
- 勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集』（講談社 一九八六～一九九四年）
- 宮内庁編『明治天皇紀』第二・三（吉川弘文館 一九六九年）
- 石井良助編『太政官日誌』第六・七卷（東京堂出版 一九九〇年）
- 日本史籍協会編『百官履歴』一・二（一九二八年刊行の復刻 日本史籍協会叢書 東京大学出版会 一九七三年）
- 我部政男・広瀬順昭編『国立公文書館所蔵勅奏任官履歴原書』上・下（柏書房 一九九五年）
- 寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』（明治所期歴史文献資料集 第一集第三卷 寺岡書房 一九八一年）
- 色川大吉・我部政男編『明治建白書集成』第二卷（筑摩書房 一九九〇年）
- 海軍省編『海軍制度沿革』卷二（一九四一年刊行の復刻 明治百年史叢書 原書房 一九七一年）
- 国立公文書館所蔵「処蕃始末」（二八七三～一八七四年）
- 海軍教育本部編『帝国海軍教育史』第一卷（一九一一年刊の復刻 明治百年史叢書 原書房 一九八三年）
- 横須賀海軍工廠編『横須賀海軍船廠史』（一九一五年刊の復刻 明治百年史叢書 原書房 一九七三年）
- 静岡県史料刊行会編『明治初期静岡県史料』第一冊（静岡県立中央図書館蔵文庫 一九六七年）
- 静岡県編『静岡県史』資料編一六 近現代一（静岡県 一九八九年）
- 前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』一～四（私家版 五のみ羽衣出版 一九九一～二〇〇七年）
- 東京市役所編『東京市史稿』遊園篇第四（一九三二年）
- 台東区編『台東区史』通史編Ⅲ（台東区 二〇〇〇年）
- 日本史籍協会編『大久保利通日記』二（一九二七年刊行の復刻 日本史籍協会叢書 東京大学出版会 一九六九年）
- 日本史籍協会編『大久保利通文書』五（一九二八年刊行の復刻 日本史籍協会叢書 東京大学出版会 一九六八年）
- 西郷隆盛全集編集委員会編『西郷隆盛全集』第六卷（大和書房 一九八〇年）
- 日本史籍協会編『島津久光公実紀』（一九一〇年刊行の復刻 続日本史籍協会叢書 東京大学出版会 一九七七年）
- アーネスト・サトウ編著、庄田元男訳『明治日本旅行案内』中巻（一）編Ⅰ・Ⅱ（平凡社 一九九六年）
- ◎WEBによる史料検索・閲覧サービス
- 国立公文書館 デジタルアーカイブ
- 国立公文書館 アジア歴史資料センター データベース

国立国会図書館近代デジタルライブラリー

東京都公文書館資料情報検索システム

事典類

日本歴史学会編『明治維新人名事典』（吉川弘文館 一九八一年）

安岡昭男編『幕末維新大人名事典』上・下（新人物往来社 二〇一〇年）

大植四郎編著『明治過去帳』（新訂版 東京美術 一九七一年）

富田仁編『海を越えた日本人名事典』（日外アソシエーツ 一九八五年）

武内博編著『来日西洋人名事典』（増補改訂版 日外アソシエーツ

一九九五年）

伝記類

勝部真長『勝海舟』下（PHP研究所 一九九二年）

松浦玲『勝海舟』（筑摩書房 二〇一〇年）

樋口雄彦『人をおろく 勝海舟と江戸東京』（吉川弘文館 二〇一四年）

樋口雄彦『第十六代徳川家達―その後の徳川家と近代日本―』（祥伝

社新書 二〇一〇年）

田村栄太郎『明治海軍の創始者 川村純義、中牟田倉之助伝』（日本

軍事図書 一九四四年）

故山本海軍大将伝記編纂会『伯爵山本権兵衛伝』上（明治百年史叢書

原書房 一九六八年）

菅貞人『近代日本造船事始―肥田浜五郎の生涯』（新人物往来社 一

九七五年）

大久保利謙編『津田真道 研究と伝記』（みすず書房 一九九七年）

高橋昌郎『中村敬宇』（人物叢書 新装版 吉川弘文館 一九八八年）

高木不二『幕末維新期の米国留学 横井左平太の海軍修学』（慶應義

塾大学出版会 二〇一五年）

吉家定夫『日本国学監デイビッド・マレー その生涯と業績』（玉川

大学出版部 一九九八年）

吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁 富田鉄之助伝』（東洋経済新報社

一九七四年）

高木正義『高木三郎翁小伝』（高木事務所 一九一〇年）

小曾根有代著、小曾根吉郎監修『小曾根乾堂謎解きの旅』（長崎新聞

社 二〇一五年）

沼波武夫『天津事件の烈女畠山勇子 伝記・畠山勇子』（一九二六年

刊行の復刻 大空社 一九九五年）

研究書・論文

松浦玲『明治の海舟とアジア』（岩波書店 一九八七年）

松浦玲『勝海舟と西郷隆盛』（岩波新書 二〇一一年）

石井孝『明治初期の日本と東アジア』（有隣堂 一九八二年）

廣瀬彦太『大海軍発展秘史』（弘道館図書 一九四四年）

沢鑑之丞『海軍七十年史談』（文政同志社 一九四二年）

篠原宏『海軍創設史 イギリス軍事顧問団の影』（リブレポート 一

九八六年)

海軍歴史保存会『日本海軍史』第一巻 通史一・二編(海軍歴史保存会 一九九五年)

富田仁・西堀昭『横須賀製鉄所の人びと 花ひらくフランス文化』(有隣堂 一九八三年)

樋口雄彦『沼津兵学校の研究』(吉川弘文館 二〇〇七年)

樋口雄彦『静岡学問所』(静岡新書 静岡新聞社 二〇一〇年)

樋口雄彦『箱館戦争と榎本武揚』(敗者の日本史 一七 吉川弘文館 二〇一二年)

樋口雄彦『幕臣たちは明治維新をどう生きたのか』(洋泉社 二〇一六年)

樋口雄彦『資料紹介 荒川重平回想録―昭和から振り返る旧幕臣の幕末・明治―』(国立歴史民俗博物館研究報告 第一三六集 二〇〇七年)

樋口雄彦『葦山代官手代の直参化と維新期の対応』(静岡県近代史研究 四〇 二〇一五年)

荻原延寿『北京交渉 遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄―』(朝日新聞社 二〇〇一年)

山本幸規『静岡藩お雇い外国人教師E. W. クラーク―静岡バンド成立の背景』(キリスト教社会問題研究 二九 一九八一年)

岩崎宏之『明治維新期の東京における商人資本の動向』(西山松之助編『江戸町人の研究』第一巻 吉川弘文館 一九七二年)

広瀬淳子「学習院が所蔵する徳川宗家旧蔵書について―忘れられた華族会館寄贈図書―」(人文八 学習院大学人文科学研究所 二〇〇九年)

九年)

展覧会図録

『企画展示 大久保利通とその時代』(国立歴史民俗博物館 二〇一五年)

『沼津兵学校』(沼津市明治史料館 一九八六年)

『図説 沼津兵学校』(沼津市明治史料館 二〇〇九年)

『神に仕えたサムライたち―静岡移住旧幕臣とキリスト教』(沼津市明治史料館 一九九七年)

『秋季特別展 幕末・維新の相模原く村の殿様・旗本藤沢次謙と村人たち』(相模原市立博物館 二〇〇〇年)